

I 日本胸部外科学会創立の模様と創立当時の思い出

昭和23年を中心として日本胸部外科学会の創立に尽力された諸先輩は小沢凱夫、福田保、大槻菊男、都築正男、前田和二郎、青柳安誠、河合直次、篠井金吾、横田浩吉、長石忠三、鈴木千賀志、宮本忍、武田義章、ト部美代志、加納保之、藤田真之助、北本治（順不同）の方々である。これらの先生の中で、福田、都築、大槻、河合、篠井、横田の諸先生はすでになくなり、青柳先生は病床に臥しておられる。現在、活躍の先生は長石、鈴木、宮本、武田、ト部、加納、藤田、北本の諸先生で非常にお元気でおられるのは心強い限りである。その創立当時の様子は青柳先生の文章と陸川先生の文章をお借りして掲載することにする。

創立発起人の一人青柳名誉教授は創立当時の模様を貴重な文献として書きとめられているので紹介する。（日胸外会誌1，4，206）。会員の多くは当時のいきさつを知らないであろうからここに同教授の記録の抄録をかかげさせて戴くことにしよう。

「米国では *Journal of Thoracic Surgery* が発行されているのを知り1932年以来愛読していたが、日本でも胸部外科学会を創立させたいものだと思っていた。戦後長石、横田、小沢教授らと計って結核外科講話会を開くことを提唱し、昭和23年2月に第1回を開催した。関東にも同様の会合（注：肺結核外科懇談会のこと）があることを知って、合同すれば全国的な学会を持つことが出来ると考えた。そこでまづ宮本、加納教授と連名で雑誌胸部外科の発行を呼びかけ、宮本教授が南江堂と交渉し発行の運びとなった。昭和23年5月第48回日本外科学会が新潟で開催された折に、最新医学社の催しで結核外科に関する座談会が5月2日に行われた（写真1参照）。

その席上で肺外科研究会の開催を提案した所が出席者横田、河合、篠井、鈴木、武田、ト部、宮本、長石諸教授の大賛成を受け、早速その年の秋から開催することに一決した。研究会の前日には大槻、都築、福田、前田教授らも集まり準備会を開き、名称は肺外科研究会では範囲が狭いので胸部外科研究会とした。福田教授は基礎固めに努力された」。

大略以上の通りであり、文中福田教授は基礎固めに努力されたとあるが、福田教授の記載（日胸外会誌1，4，205）から抜粋抄録させて戴くと、

「宮本教授が肺結核外科懇談会の世話役をされており私も度々座長に推されたりした。そんな関係もあって第1回胸部外科研究会に当っては午前中の演題の進行処理に当り、総会議事を司会し大槻教授が第1回会長に選ばれた。都築教授は資金の面倒をみて下さった。

最初は200名足らずの座席で十分な会合であった」。

以上お二人の記載にもあるように日本胸部外科学会は昭和23年11月3日大槻菊男教授を会長として第1回胸部外科研究会として発足したものである。

昭和二十三年五月二日
 青柳先生
 河合百欠 藤野 横田 浩吉
 大園 明 藤野 青柳 美代志
 新長 忠雄
 鈴木 長石 宮本 武田 篠井 横田 河合
 藤野 青柳



白羽 鈴木 長石 宮本 武田 篠井 横田
 藤野 青柳 河合

昭和二十三年五月二日、青柳教授が日本胸部外科学会の創立を提唱され参加諸先生の賛同をえた新潟市鍋茶屋での記念写真と寄せ書きである。これらの先生の中で河合、篠井、横田の三先生はすでに亡くなられた。なおこの写真と寄せ書きは宮本忍先生より拝借した、白羽、藤野先生は記録のため参加された。

日本胸部外科学会設立当時の思い出

長 石 忠 三

日本胸部外科学会設立のきっかけとなったのは、昭和23年5月1日から3日まで新潟市で開かれた第48回日本外科学会総会（中田瑞穂会長）を機会に、最新医学社の松原習吉氏の肝入りで、同市で開かれた肺結核外科座談会である。

5月2日の夕べ、学会終了後に同地の鍋茶屋で開かれたこの座談会に集ったのは、青柳安誠、河合直次、宮本忍、長石忠三、篠井金吾、鈴木千賀志、武田義章、卜部美代志、横田浩吉（アルファベット順、敬称略）の9名であった。

この日の会合は日本胸部外科学会設立のきっかけとなった記念すべきものであるが、肺外科に関する全国的な研究会を作ろうとの考え方は、関東では昭和22年1月に発足した結核談話会で、関西では昭和23年2月に発足した結核外科談話会で、すでに醸成されていて新潟での前記の会合の頃には、機は十分熟していたのである。その証拠には、東西協力して全国的な研究会を作ってはどうかとの御提案が青柳安誠京大教授（のちに名誉教授）からなされた時には、出席者一同双手を挙げての大賛成で、かねてから互いの心にあった懸案が一気に解決に向ったの感があり、これを機会にあとはトントン拍子に事が運び、同年秋には名前は胸部外科研究会であったが、事実上の日本胸部外科学会が発足している。その間の消息は、のちに日本胸部外科学会雑誌1巻、4号、205頁（昭和28年10月）に東大福田保教授（のちに名誉教授）により「胸部外科学会の成り立ち」と題して書かれており、また、同誌同巻号、206～7頁（昭和28年10月）に京大青柳安誠教授（のちに名誉教授）により「日本胸部外科学会設立の前後」と題し、遠い将来を慮って書き残されている。前者は、胸部外科学会設立当時の背景を、後者はその前後のいきさつを物語って余すところがない。

ともあれ、以上をきっかけとして、昭和23年11月3日に第1回胸部外科研究会が発足している。会場は東大内科講堂で、当時の肝入り役ないし司会役は東大福田保教授であった。

その前日、文化会館で準備会が開かれ、その席上で、すでに一応それと決っていた肺外科研究会という名称では、範囲が狭すぎるとの意見が出て、翌日の会合では胸部外科研究会として発足することに変更され、その第1回会長に東大榎菊男教授（のちに名誉教授）が、当日の司会役に東大福田保教授が推薦された。この会合には東大都築正男教授や慶大前田和三郎教授（ともにのちに名誉教授）も出席されている。

第2回は昭和24年10月16、17両日に青柳安誠会長の下に京都で、第3回は昭和25年10月29、30両日に河合直次会長の下に千葉で開かれ、この回から会名が日本胸部外科学会へと改称されている。

かくして東西協力して全国的な学会が作られたので、最初これを作ることを目的として組織された関西の結核外科談話会は地方的な結核外科研究会として残す方針に変更された。この研究会は春秋2回長年にわたって開かれていたが、のちに胸部外科研究会と改称され、さらに年を経て現在の日本胸部外科学会関西地方会として発展的に解消している。

なお、日本胸部外科学会の設立と同年、すなわち昭和23年には、南江堂から雑誌「胸部外科」が創刊されている。昭和28年に日本胸部外科学会雑誌が発刊されるまで5カ年の長きにわたって事実上学会機関誌の役割を果たした点で特記すべきものである。（京都大学名誉教授）

胸部外科学会創立の経緯

宮 本 忍

初期の胸部外科学会は肺結核外科を中心としたものであるが、その端緒は昭和19年（1944）7月10日の第1回結核外科懇談会に発している。これより先、5月3日私は東京警察病院の三藤寛氏と相談し、両名が幹事となって奔走した結果、坂口、大槻、都築、前田、岡の諸先生に顧問になっていただき、厚生省の支援を得て市ヶ谷会館において第1回の会合を開くことができた。集まったのは坂本、松倉、中谷、高田（善）、岩原、長堀、ト部、藤田、加納、宮本、水野、桜井、室田の諸氏で、厚生省から浜野・荒木の両氏が参加した。翌昭和20年（1945）1月6日、第3回結核外科懇談会には宮城療養所の富山所長と会田宗太郎氏も参加し、Monaldi 空洞吸引療法と胸廓成形術について研究発表があった。この懇談会は、療養所と大学との間に結核外科の研究と普及において協力体制を作ろうとする意図で開かれたものであり、福田保先生のご尽力に負うところが多い。

戦後、結核問題の社会的重要性に鑑み、内科と外科を問わず研究者の連繫を深めるために結核談話会設立の気運が高まったので、次の趣旨書（昭和22年1月4日付）を各方面に発送した。いわば、この会は戦前の結核外科懇談会の発展的解消を志したものである。

結核談話会設立趣旨書

結核は戦争につきものといいますが、とくに敗戦後の栄養状態の悪化は国民の健康をひどく障害し、結核死亡率の激増となって現われています。厚生省の統計によりますと、昭和21年度は死亡者数20万、死亡率は人口1万につき28.4人といわれ、本年度は更にこの数と率を上廻るものと想像されます。しかも結核にかかって倒れるものは日本再建に最も必要な青年諸君であります。しかも現在のように各研究機関、予防並に治療施設がばらばらになってはいるこの破局的な結核の蔓延をくいとめることは不可能であります。それ故結核の行政、研究、治療、予防にたずさわっている私共が総力を結集し、この恐るべき結核と戦わねばならないと思います。幸にも司令部当局もナイト博士を責任者として日本の結核対策に本格的な御世話をいただけると聞き及んでいますのでこの際は私共が同志的な集まりを作って研究や啓蒙に全力を尽すための第一歩をふみ出す絶好の機会と考えます。

去る12月18日は国立東京第一病院に有志のものが集まり会則と会の方針などについて話し合い大体成案をえまして左記に発表し広く同好の士を募りたいと思います。会の主旨に御賛成の方々は進んで御参加をお願い致します。入会は書面又は例会当日会場で受付けます。

第1回例会は1月20日午後1時、神田駿河台日本医師会館、講演者マ司令部公衆衛生部ナイト博士「演題アメリカの結核について」であった。講演終了後同会は正式に発足し、事務所は国立東京療養所内におかれ、その担当者は砂原茂一所長と私であった。発起人は、内科、外科、厚生省関係者計41名であった。

南江堂の「胸部外科」は、昭和23年9月10日、胸部外科学会創立に先駆けて創刊され、その準機関誌としての役割を5年間にわたってはたしたから、それをふくめて学会創立前後の事情を述べよう。

昭和22年（1947）11月28日、大槻先生にお会いし、京大の青柳教授から、胸部外科雑誌を作りたい

いというお手紙をいただいたが、関東では私が中心となってことを運びたいからご指導をお願いしたいと申し出た。この件については、南江堂の勢メ氏とすでに了解済みであった。12月23日、勢メ氏が来訪され「胸部外科」創刊計画が進捗中であり、B5版にしたいと報告した。12月25日、青柳教授から胸部外科学会に関する返信があり、雑誌の発刊についてはもちろん賛成であり、監修者として横田浩吉・岩井孝義両教授をすいせんしてこられた。昭和23年(1948)1月11日午後、勢メ氏来訪、「胸部外科」創刊についていろいろ打合せ、B5、66頁(内アート2頁)、定価30円、3000部にする予定であるという。1月16日、午後6後頃から赤坂山王、天下茶屋で雑誌発行の相談会を開いた。出席者は、篠井、ト部、石川、藤田、宮本、小立、相川、勢メの諸氏、雑誌の体裁、組み方などは大体原案通りに決定、4月創刊の予定で編集プランをねった。1月17日、大槻外科医局で河合直次教授にお会いし原稿をたのみ、胸部外科学会についてもお世話をお願いした。河合教授が関西に向向いて、小沢・青柳両教授と学会設立のとりきめをして下さることになった。5月2日、新潟で外科学会が開かれたとき鍋茶屋で最新医学社、塩野義主催で「肺臓外科」の座談会が開かれた。出席者は青柳、篠井、横田、武田、長石、鈴木、河合、ト部、宮本、京大外科側白羽、藤野の両氏であった。この席上、肺外科研究会を結成し、秋に東京で第6回学会を開くことが申し合わされた。

胸部外科の旗印にするように大槻先生からいわれた「胸部外科」誌発刊の趣旨書は次の通りである。

最近におけるわが国の肺結核外科は、胸廓成形術を中心として、飛躍的な発達と普及の過程にあります。しかしながら、これを欧米諸国の水準に比較しますと、約10年の立ちおくれを認めざるをえません。とくに、肺結核外科以外の肺臓外科や心臓外科におきましては、いまだ実験的研究の域を脱しておりません。

講和会議を目前に控え、欧米の学界と学問の交渉が再開しようとしているとき、わが国には、いまだ胸部外科を中心とした学会が作られておらず、しかもこの分野を取扱う専門雑誌が1つもないことは、まことに残念であります。

今回、これらのことを痛感した2~3のものが集まって、胸部外科に関する季刊雑誌の発行を計画いたしました次第であります。御承知のような出版事情のため、新しい月刊雑誌の発刊は許されておりませんので、さしあたり年4回ぐらいの割合で、季刊雑誌(B5版、60~70頁程度のもの)を出したいと考えています。われわれは、アメリカの胸部外科雑誌に負けないものを作りたいのですが、それがためには諸先生方の御援助が絶対に必要です。

なにとぞ、この計画に御賛同下され、御支援をたまわりたく存じます。

昭和23年2月、胸部外科編集委員。

11月3日、第1回胸部外科研究会が福田保教授司会のもとで東大内科講堂で開かれた。午後の議事で胸部外科学会規則が決定し、それにもとづき胸部外科学会が成立し、第1回会長に大槻菊男先生が選ばれた。演題は23、参加者は約250名。

胸部外科学会の先駆をなしたといえる東京結核談話会も、昭和23年1月10日には第12回を数え、お茶の水の東京医科歯科大学講堂で総司令部外科指導員ワナー・F・パワース中佐の講演「肺結核外科」が行われた。関西では青柳教授のご尽力で同年2月第1回結核外科談話会が京大耳鼻咽喉科教室講堂で開かれた。この会は2月と8月に開かれることになり、第2回から結核外科集談会、第10回から結核外科研究会と改称された。さきに述べた東西の胸部外科研究者が一堂に会した鍋茶屋における座談会は、胸部外科学会創立のきっかけになったものであり、その機会を設けられた青柳安誠先生のご功績は忘れてはならない。
(日本大学名誉教授)

胸部外科学会創立当時の思い出

武 田 義 章

昭和23年5月1～3日新潟大学医学部で今は亡き中田瑞穂先生御主催の下に、第48回日本外科学会が開催された。その時5月2日に当時肺結核の外科的療法を行って居る者に召集がかかり、米国の *Journal of Thoracic Surgery* があって、多数の胸部外科及びその周辺の論文が掲載されている如く、日本でも胸部外科の学会と研究発表の機関誌を持ちたいが、どう思うか、と話の中核が発表され、吾々は直ちに賛同した。

それより先に昭和23年2月に京大、阪大、京府大の先生方の相談の上、京大で第1回肺結核外科懇談会が開催された。東京でも同様な研究会が持たれている為、日本胸部外科学会は容易に産れ、昭和23年11月3日に胸部外科研究会の名称の下に東大の講堂で開催された。この時は大槻先生が会長であった。第2回は京都大学で青柳先生会長の下に、10月16、17の両日に、会の名称も日本胸部外科学会として、研究発表が行われたが、肺結核の外科的療法に関するもののみであった。今日に於ける胸部外科学会の研究発表と較べると、医学の進歩の足跡が明瞭にわかる。

なお学会の機関雑誌は南江堂の胸部外科を代用していたが、第5回武藤完雄先生に仙台で日本胸部外科学会を主催して戴いた時に、機関誌は独立して持つべきであるとして、現在の日本胸部外科学会雑誌が発刊された。
(大阪大学名誉教授)

日本の胸部外科ことはじめ

加 納 保 之

日本胸部外科学会は今年第30回の総会を迎えた。その機関雑誌である日本胸部外科学会雑誌はただいま第25巻を刊行中である。これは5年間にわたる学会雑誌を持たなかった時代があったことを示している。ここでちょっと目を転じて南江堂の「胸部外科」をみると、これが今年第30巻を刊行しているのであって日本胸部外科学会の創設と「胸部外科」の創刊の時期が一致していることがわかる。胸部外科という限定された専門分野のことであるから両者の間に何等かの関係があったであろうことは十分推測されるであろう。このことについては確かに密接な関係があったのである。それはこの学会の創設の当時は会員数が156名、会費が年200円で財政基盤が弱くて機関雑誌の発行ができないために南江堂の了解をとりつけて「胸部外科」に5年間に亘り機関雑誌の役をつとめてもらったのである。

「胸部外科」第1巻第1号（昭和23年9月10日発行）の101頁に“肺外科研究会のお知らせ”として第1回肺外科研究会を11月3日に東京で開催することが広告されている。世話人は福田教授で提出された研究発表は24題であり、その内容は「胸部外科」第2巻55頁に掲載されている。この集会で名称を胸部外科学会とし、総会を秋に開催することと僅か12条からなる簡単な会則が定められた。第2回胸部外科学会は昭和24年10月に京都市で青柳教授を会長として開催され演題は76題に達した。次いで第3回は昭和25年10月末に河合教授を会長として千葉市で開催され、このときから日本胸部外科学会と改称された。第4回は大阪市で小沢教授を会長とし、第5回は仙台市で武藤教授を会長として昭和27年10月に開催されたが、このときの総会で独立の機関雑誌を持つことが議決されて「日本胸部外科学会雑誌」が誕生し、名実ともに具なわった日本胸部外科学会ができ上がったのである。

これらの初期の学会の演題はその八・九割が肺結核関係であるが、わが国の胸部外科は肺結核の外科を母地として成長してきた。これは日本だけのことではなくて世界を通じての胸部外科発達史上の事実である。それは結核が伝染病であり、親類縁者に結核患者を持たないものはないと云っても云い過ぎではない程蔓延していた時代に於てその撲滅策が衛生学的に、治療学的に、また行政的にあらゆる方面から取り組まれたことは当然である。わが国でも昭和10年頃から結核対策が衛生行政上の最重要課題とされ大阪市や東京市等は卒先して結核療養所を建設した。昭和12年には結核のために除役された兵士のため国立の結核療養所を造ることになりまづ5カ所3000床整備が始められた。ところが間もなく満州事変が始まり、第二次世界戦争へ巻き込まれていった。あらためて云うまでもないことであるが戦争は結核患者を激増させる。そこで昭和14年頃から結核傷痕軍人のための療養所を全国に亘り25施設12,500床が整備された、そしてこれらの施設へ各地の大学から新進気鋭のドクターが進出していった。その頃から凡そ30数年を経た今日では当時の新進気鋭の士もそろそろ第一線から退きつつあるが、今日の日本の胸部外科学界を育成してきた殆んどすべてのドクターがこれらの結核治療施設と何等かの関連をもっていることは確かな事実である。

(防衛医科大学校教授)

創立当時の思い出をめぐって

北 本 治

原稿依頼をうけ、光栄に存じます。記憶がよくありませんので、第1回胸部外科研究会の記事（「胸部外科」1巻2号）および、日本胸部外科学会雑誌1巻4号の故福田保先生の「胸部外科学会の成り立ち」、同じく青柳安誠先生の「日本胸部外科学会設立の前後」を読み返しましたところ、それらに充分尽されていますので、筆が進みませんでしたが、再三のご依頼におこたえするため、一筆させて頂くことにいたしました。

当時の背景としましては、結核の死亡率が187.2（昭23）を数え、近年の9.5（昭50）の十数倍もあり、これを「何とかしなければ」という時代で、結核の外科的療法の極めて大きな位置を占めておりました。その social needs を反映して、それを中心課題として取り組む学会が要望されたわけですが、同時に心臓外科の開発も芽ばえておりました。

筆者は当時東大第3内科の助教授時代でしたが、大学卒業以来師事させて頂きました故坂口康蔵教授が、糖尿病とならんで呼吸器疾患ことに肺結核に関心を寄せられ、かねがね外科の都築教授と協力されまして、肺結核の外科療法の発達を推進しておられました関係もあり、肺結核の外科療法については、格別な注目し、またみずからも空洞吸引療法を手がけ、故塩沢総一先生と共著で、空洞吸引療法の小著を出しておりました。外科のト部美代志博士（のち金沢大学教授）とは患者さんの手術をお願いします機会も多かったのですが、さらに、当時創刊の計画のありました、南江堂の「胸部外科」の編集会でも一緒でした。また、この編集会には、宮本忍博士（のち日大教授）や第2内科の藤田真之助講師（現東京通信病院院長）が顔を合せましたので、お互に期せずして、胸部外科研究会発足の気運が出来上がった気がいたします。と申しましても、私共は当時若輩でしたので、このための下働きをしようということで、南江堂の応援をかりながら、将来の学会を夢みながらも、まず研究会をスタートさせることに、奔走したものです。昭和23年11月2日の夕方、文化会館というところで（今の上野の文化会館ではありませんが）、大先生方が打合せにお集り下さり。翌11月3日に東大内科講堂を借りまして、第1回の研究会を開いたという次第でした。故大槻菊男教授を会長に、故福田保教授が司会に当られました。1題10分で、演題数は23でしたが、これが皮切りになったわけです。当時のエピソードは、まだ、手札形のところで、X線写真はシャウカステンを使用し、多くの図表は、大きな画用紙にかいたものを、木の腕木に画鋏でとめて、これを図表掲揚台にかけるといいうやり方でした。会場の内科講堂の裏手の廊下で、それらの図表のついた台木をあちこち持ち廻って、会場へ運んだことをなつかしく思い出します。藤田真之助博士や、ト部美代志博士らもそうだったと思います。

全く今昔の感にたえませんが、十年一昔といわれることからみれば、ことにサイエンスの社会においては、むしろ当然の進歩なのかもしれません。本学会の末長く発展されますことを祈念いたしまして、稚筆を措かせて頂きます。

（日本胸部外科学会特別会員東大名誉教授、杏林大医学部長）

胸部外科創立当時の思い出

藤 田 眞 之 助

日本胸部外科学会の創立は雑誌「胸部外科」の創刊と同じ年の昭和23年である。戦前から結核に興味を持ち、東大内科で盛んに人工気胸療法を行っていた私は、内科医ながら肺結核の治療の完遂にはつとに外科療法の必要性を感じていた。幸いに以前から個人的に知遇を得ていた都築教授のご厚意で、都築外科にちょいちょい出入りして、受持だった患者の胸成術を見学したり、横隔神経麻痺術を教えていただいたり、木本助教授から胸膜癒着焼灼術の手ほどきを受けたり、卜部講師と一緒に空洞吸引術を試みたりしたのであるが、戦後間もなく象牙の塔を出て、現在の病院に移り結核科を開設した。

たまたま昭和23年春胸部外科研究会創立の話がまとまり、その第1回が東大で開かれることになった。福田教授が準備委員長となり、宮本、卜部両博士と、内科から北本助教授と私が幹事として開会の準備にあたり、いよいよ11月3日午前8時半、東大医学部内科講堂で福田先生司会のもとに開会された。この講堂はよく内科の臨床講義に用いられた小さな階段教室で、私たち内科医局員が長く親しんだ処である。

初め名称を肺外科研究会としようということであったが、前日の本郷。文化会館での世話会会で、範囲を広げて胸部外科とすることに決まった。これはその後の学会の進展をみると先見の明があったことになる。

午後の講演に先立って会則が参会者一同によって可決され、第1回会長に大槻先生が推された。この会則は12条にわたる簡単なもので（胸部外科1巻2号）、（本誌75頁参照）、役員は会長1名、評議員および幹事はそれぞれ若干名とされ、会長は会員多数の推薦により、評議員および幹事は共に会長の委嘱によって定められるとある。会費は年100円というものも今昔の感に堪えない。

演題は初めてのことであり、準備期間も少なかったせいも、特別講演もシンポジウムもなく、一般講演が23題だけであった。テーマとしては、胸成術のほか、長石助教授らによって考案された胸膜外合成樹脂充填術やそのころ行われ出した肺葉切除術など、肺結核を対象とする研究報告が主であった。肺切除については当時わが国では黎明期で、それだけに少数例の報告ながら、その適応と手技について熱心に討議が行われた。

当日相い会する者約250名、夕刻5時盛會裡に閉会されたが、胸部外科研究の夜明けというべき記念すべき集まりであった。

第2回には研究会を学会と改称して、翌昭和24年10月京都において青柳会長のもとに行われた。会期も2日、特別講演3題のほかに一般講演も76題に達した。第3回（千葉、河合会長）には一般講演が追加および共同研究を含めて117題、第4回（大阪、小沢会長）には111題、映画供覧もあり、第5回（仙台、武藤会長）には143題と数を増している。その内容も肺切除の研究が増し、第3回には大血管手術の実験的研究と食道の手術報告が初めて登場した。その後気管支や肺に比して心臓、血管手術や麻酔に関する報告が次第に増加し、最近では心臓・血管が専ら主役を演じている。

私たちは第1回には両側気胸のさいの縦隔（洞）ヘルニアの症例を報告したが、その後胸膜癒着焼灼の問題や、人工気胸、胸成術などによる縦隔動揺の問題などを発表した。その後も毎回出題

し、また発言もさせていただいたが、初めの頃学会にさいして催された胸部外科をめぐる座談会では、大いに楽しみながら勉強させていただいたのも懐かしい思い出である。

なお私は初めから評議員の席を汚してきたが、去る49年香月会長のときの総会で特別会員に推薦された。胸部外科に関心を持っている内科医としてまことに光栄の至りである。この創立30周年を契機として日本胸部外科学会のみますますの発展を祈って止まない。

(東京通信病院々長)

裏方役をお引受けして

勢 〆 信 義

〈編集者はあくまで裏方役にて、舞台の上には姿を見せないこと〉をモットーに、今日まで約40年間を医学関係の編集にいそしんでまいりました。私の編集者生活に終止符を打つべき契機に入りましたので、塩沢正俊先生からのお誘いもあり、早田義博会長からの要請をいただきましたことに甘えさせていただき、日本胸部外科学会の創立前後の裏話の一端をご披露いたしたく筆をとりました。

「大河は一朝にしてならず、その源泉に遡れば一滴の岩清水から」といいますと、何か諺めきますが、日本胸部外科学会の創立からその以前をたどると、そのようなことが如実にびったり当てはまります。一滴一滴の岩清水はあちらからも、こちらからも滴り落ちて、それがだんだんに集結して小さい流れを形成し、そのいくつかの同様の流れが合流しつつ学会が誕生し、今日の大河をきたし得たといえましょう。

東に「結核外科談話会」の声が興り、西に「結核集談会」の声があがり、その他にもいくつかの集会在、それぞれ合流する形となって「第1回胸部外科研究会」（東京）が産声も高々と昭和23年11月3日に誕生し、第2回（京都）にはその頭に「日本」という冠がつき、第3回（千葉）において初めて「日本胸部外科学会」となりました。

因みに結核外科談話会は戦時中数回ひらかれ、厚生省の肝入れもあって肺結核外科を中心に、戦後は結核全体にひろげられ「結核談話会」となり、会員約300名にて昭和22年1月から再興されておりました。

一方、結核集談会は昭和23年2月に発足し、毎回盛会をきわめておりました。

また別に「胸部外科談話会」が昭和23年7月に佐藤清一郎先生の講演を中心として開かれました。この講演をご依頼に神奈川県大磯町の佐藤邸にお伺いした折、先生から大正4年の朝日新聞の切抜きを見せていただき、そこには先生の肺結核手術の1例が大々的に報じられておりました。大正4年といえば遙か昔のことなので一驚しました。その上、講演の件はご承諾が得られず、すぐすぐ引きさぎがってきましたが、旬日をおかず再びご依頼に参上いたしますと、今度は快くお引受けくださいと、私もほっといたしました。

それが第1回胸部外科談話会にて、会場は日本医師会館の講堂をお借りして開始いたしました。広くお知らせもできなかったにもかかわらず、活発な意見と多数の方々が集まれ、なかなかの盛会でありました。当時、いかに多くの人々がそうした集会を熱望されていたかが裏書きされます。

その頃「胸部外科」の創刊について京都に青柳安誠先生をお訪ねしてご賛同を得たのですが、その時の先生のお喜びは大変なもので、その夜、一席をもうけられ歓待を受けましたことは恐懼の至りでした。前記の結核集談会の抄録は「胸部外科」創刊号から掲載され、以来ずっと同会の抄録は同誌に掲載するお約束をいただきましたが、この会は全結核に渡りますので、主催者が必ずしも外科の方とは限らず掲載もれもあります。その後、この会は二分され、一方が日本胸部外科学会近畿支部となって続いております。

私どもが「胸部外科」（南江堂刊）を創刊いたしましたのは、昭和23年9月にて、これは胸部外科学会の創立を促進させるための一助ともなればという意味を、初めからもっておりましたし、胸部外科学会が創立されてから第5回の総会のひらかれます間は、その会計と事務的処理とを私がお

預りするはめになってしまいました。

学会の事務所はどこにするかということで、あれこれ話がありましたことも「胸部外科」の編集会議の中で行われ、その結果、藤田真之助先生のおられる東京通信病院がよいということになりました。通信関係なら往復の郵税も「通信事務」にて無料になろうという妙策だったのですが、一度ぐらい何かの案内がそれによって出されたようですが、それはすぐ駄目だということがはっきりして、とりやめになりました。それなら東京大学が一番似つかわしい、ということで、事務所は第二外科教室におき、受信箱は第一外科教室の婦長室の前にて、日本外科学会の受信箱と並んで大きな箱が据えられ、そこに通信いっさいが集められ、その処理は私の役となり、毎日その通信をとりに通いました。

それは第5回総会の武藤完雄会長（東北大学）の時までつづき、その折、学会の事務を専属にするものをおきたいという希望がでて、私から日本外科学会事務所の河合・速見両氏にお話をして、外科学会と併行に処理していただくことに承諾してもらい、事務いっさいをお渡しいたしました。

したがって事務取扱いは第1回から第5回まで私がお預りして、第5回の途上から日本外科学会事務所にお渡しした次第です。

なお、この時点まで「胸部外科」は準学会誌として歩んできましたので、学会の記事はすべて「胸部外科」誌上に発表されておりました。この機から学会誌が学会から刊行されることになり、学会の記事はすべて学会誌に移りました。

「胸部外科」の一つの使命は達せられましたので、雑誌ぐるみ学会に移行する案も出ましたが、「胸部外科」には「胸部外科」としての使命があり、学会とは別に一般胸部外科関係者への啓蒙運動に大きな役割をもつことから、その意味にてぜひ続行してほしいという声が多く、これは簡単裡に決つて、学会誌は昭和28年より刊行され、昭和52年にて25巻になりますが、「胸部外科」は創刊30周年を迎えることになりました。したがって学会の回数と同様になります。

第5回の総会の折、武藤完雄会長からご招待を得て、それまでの労をねぎらう感謝状と金一封を頂戴し、その夜の宴席には上座に坐らせられました。私が上席に坐っておりましたので、宍戸仙太郎先生（当時、武藤外科教室、そののち泌尿器科教授、現在名誉教授）から木村忠司先生（京大外科、そののち教授、名誉教授、愛媛大学病院長、現在故人）に間違えられ、いろいろ話かけられて面喰らってしまったことが印象的に強く、今も脳裡に残っております。

筆が前後いたしますが、第1回、第2回までの総会には、すべて世話人・幹事（極く少数）にて事が運ばれ、第3回から評議員が誕生しました。それまでの世話人・幹事の方々によって評議員が挙げられたのですが、私はその名前を掌握していなかったのです。

総会開催月の4～5カ月前から、その名を知らせてほしいと、私宛に河合直次会長からお電話があり、それが数回に及びました。教室の方が千葉からわざわざお訪ねくださいましたが、正式の人名を掴んでいない私には何ともお答えできず、総会の日は迫ってまいりますし、気が気でなく、やむなく私の頭の中で候補者を60～70名あげて、だいたい30名ぐらいと伺っていたので、この中から約30名をお選びください、とお渡しして、ほっとしました。

いよいよ総会の日となり、会場に何うと、私のあげた候補者全員が評議員として発表されておりましたので、びっくりして河合先生にそのことを申し上げますと「いいよ、いいよ、あれでいいんだよ」とおっしゃられ手のほどこしようもなく、冷汗三斗の思いをしたことなど、昨日のように想出されます。

日本胸部外科学会の30周年を迎えられましたことを衷心よりお慶び申し上げます。（南江堂顧問）